俳句

大津俳句会

あれほどの蟬の命の絶え果てし　井芹眞一郎

袖口でひとふきし食ふ柿甘し　秋山　恵

草原に秋の七草捜しをり　大塚喜久子

暮れなずむ遠き山から鹿の声　佐賀　久子

阿蘇五岳及ばぬ高さ秋の雲　松尾　昭雅

青空を少し動かし松手入　岡崎　浩子

木の実落つ音のころがる坂の道　佐澤　俊子

俳句

つのはな句会

ズキズキと胸に愁思の秋落暉　木庭　杏子

秋夕焼怒りも闇も飼いならす　上杉　波

望郷の夢の途中を秋螢　矢嶋　道子

黄昏路までまだある良き日芙蓉咲く　水野　春子

騒音の多き世に咲く白木槿　梅木トキエ

置き去りの女児の泣き声か台風（あらし）の夜　塚本　洋子

お絵描きの花野このごろきなくさい　榮田しのぶ

赤とんぼ　故里ビルの数増える　志賀　孝子

くしゃみして夜の曼珠沙華みて帰る　田上　公代

短歌

大津短歌会

雨後の木の枝葉に宿る水滴は朝光（かげ）浴びて宝石のごと　豊岡ミツル

検診を無事に終りて足軽し道々ほのか花のまぼろし　吉永　恵子

亡き人の住まいし家を訪ぬれば甘夏あまた実をつけており　鞍　岳志

名月は光り輝き老いの目は二重三重（ふたえみえ）にと行く末願う　管野　静

空仰ぎ木下に死んでいる蟬に夏征服の夢叫しか　坂本　杲子

秋彼岸分け入る木々は調和して深々息す音を潜（しそ）めて　小平　善行